昭和45年創刊　令和5年8月1日発行（毎月一回一日発行）俳句雑誌　沖　第54巻第8号

沖

8
2023

俳句雑誌［おき］

からくり櫓

能村　研三

十薬を根こそぎ抜いて憂さ晴らし

雨音にこころを添はせ濃紫陽花

芒種けふ豆のスープのうすみどり

夏燕町に消えたる自転車屋

梅雨の町からくり櫓の小賑はひ

迎へ梅雨芸者小径の百度石

柩拭くことより祭仕度かな

舫綱祭の空へ放りけり

昏れがたの山襞近し祭笛

滝落つる内なる修羅を隠しぬて

富士山

八月の祝日は十一日の「山の日」。私の登山歴は決して多くはないが、中学、高校、大学時代に富士山に三回登ったことがある。他は浅間山、立山、三原山、阿蘇山など数えられるほどの経験で、登山家から見れば笑われてしまうような程度である。しかも俳句を作るようになってからは、吟行会のハイキング的なものを除いては登山らしき山登りはしていない。

今から思うと、もう少し山登りの経験を俳句にしていればよかったと後悔している。

登四郎も本格的に登山に取り組んだとは言い難いものの、健脚で私よりは山登りを得意としていたようだ。

句集『咀嚼音』の時代には、姉の萌子と連れ立って立山に登っている。

霧をゆき父子同紺の登山帽

霧裂きてぎくりと峙ちし一の壁

さらには昭和三十三年、四十七歳の時に鳥取県の伯耆大山に登っている。

孤独登山者に巌裏ほそき滝一条

日の色の霧が霧追ふ行者谷

昭和五十三年には大学時代の同級生と八甲田山に登っている。

八甲田連峰秋色未だし西つ方

榧の木平はしりの紅のななかまど

私が俳句の手ほどきを受けた福永耕二は、文学青年と思いきや大変な登山家であった。市川学園時代、文芸部の顧問でありながら山岳部の顧問も務められ、生徒たちを引き連れて北アルプス縦走を何度もされている。

第一回目の「沖」の勉強会は那須で行われたが、この時も夜遅くまで酒を飲んでいたにもかかわらず、まだ明けきらないうちに私たちを引き連れて山登りをし、その健脚ぶりに驚かされたことがあった。

私は三十代になってからも富士登山に挑戦したことがあるが、この時は悪天候に遭い途中下山を余儀なくされた。

荒天に小屋の夏炉の奥湿り

無念とも勇気とも中途下山せり

最近は歩くのも以前より遅くなったが、歩けるうちに時間をかけても富士山に登ってみたいと思うようになった。

能村　研三

荒汐部屋　森岡　正作

万緑に浸り切つたる熟寝かな

玄関を守る父の下駄梅雨に入る

人形町路地小暗きに走り梅雨

青しぐれ荒汐部屋に軒を借る

蝸牛往く電磁波を掻き分けて

光らねば己が消ゆる夜光虫

十薬の奔放に科無かりけり

汗の肌

汗は気温が高い時に出る。酷暑には黙って座っていても出るが、まして運動などをしようものなら噴き出るという表現が適当であろう。ただ汗には体温調節という役目もあるとのことで嫌ってばかりもいられないが、登四郎先生の〈汗の肌より汗噴きて退路なし〉という御句の「退路なし」に注目すれば、尋常ならざる汗となる。

掲句は沖創立後に出版された第四句集の『民話』に所収されているが、第三句集の『枯野の沖』の「あとがき」には、「この句集は私が俳句という詩型に無限の可能性を信じようとしたり又絶望したりさまざまな試行錯誤を重ねた混沌時代に生まれたもの」とあり、「伝統詩型と闘って傷だらけになった」とある。つまり先生の汗は俳句という詩型ととことん闘った精神的緊張に因るものなのである。何と貴重な汗であろう。こうした汗の一滴も持ち得ることなく、冷や汗を拭う我が身を反省するばかりである。

濤声集

さるすべりの根元　千田百里

青春は校歌の世界夏匂ふ

蚕豆が宙を差しをる登四郎忌

御神輿を追へば新塔蹤いてくる

冷汁の箸置く散骨ばなしおく

＊わが死後の住処はさるすべりの根元

豪華客船米寿の夫を乗せて夏

夕焼　辻美奈子

包帯の中夕焼の氾濫す

＊黒南風や白き卓布に核を問ふ

広島や折鶴は尾を立てて夏

梅雨深し上潮淀む隅田川

額の花は組石碑の文字赤し

元吉原掘割の跡ところてん

蒼茫集

黒潮

峰崎成規

＊黒潮は太き助走路初鰹
くづし字の画賛を紙魚がなほ崩し
梅雨冷や独りが集ふ映画館
日雷手斧の梁を息づかす
甚平はちよいと余所行き客を待つ
打水や味につまづく人形町

水の随筆

矢崎すみ子

浮城へ石橋二つ燕子花
＊アルプスの水の随筆花山葵
あをあをと夏霧通ふ馬柵棒
栞紐いつしかほぐる桜桃忌
赤色の蔵の瓦や夏燕
蕗の森雨と小人のピチカート

水痩せの櫂

荒井千佐代

蕗を剥くははの一と世を思ひつつ
網棚に赤きベレーや巴里祭
船台に船干洞びて花海桐
雨脚が雨粒となる夏料理
立てて干す水痩せの櫂ひでり星
＊夏潮や男生みしは女なる

発光体

栗原公子

垂直とふ勢ひ一気に男滝
植田まだ風と遊べぬ程の丈
＊湖は発光体なり山滴る
ゆつくりと効く痛み止め若葉雨
更衣似合ひしはずのワンピース
風に髪あづけ少女は五月の木

飛鷹選評

能村　研三

虹　二　重　色　交　は　れ　ば　消　ゆ　る　色　　頓所　敏雄

虹は太陽の光が水滴の中で一回反射すると生じる。反射が二回あった時、二つ目の虹が現れるという。

作者はめずらしい現象に遭遇したのだが、その瞬間に俳人ならではの観察眼を働かせた。頓所敏雄さんは真間山弘法寺で開かれていた人間学校で奥様の友枝さんと一緒に参加されていた方。しばらく中断されていたが、最近は例会にも熱心に参加されているのは嬉しいことだ。

咲　き　満　ち　て　桜　淋　し　き　分　教　場　　工藤　邦子

分教場は、小中学校、高校などで交通機関が不便な地域や離島などに設置されたものだが、近年の少子化の影響により廃校となるところが多くなってきている。入学式の行われる分教場、今年の新入生もわずかで、在校生も含めても少人数で淋しい限り。校庭の桜も見事に花を咲かせてくれたが、どことなく淋しげであった。

サ　イ　ダ　ー　の　百　の　つ　ぶ　や　き　地　下　茶　房　　岩波　博庸

最近は炭酸飲料が多く出回っているので、サイダーという言葉自体が懐かしいものになっている。栓を切ってコップに注ぐと、炭酸の泡がいっせいにあがって爽快である。地下茶房に入ってサイダーを注文したのだが、コップに注がれるとたくさんの泡が吹きあがってきて百のつぶやきのように思えた。

梨　の　花　咲　き　満　ち　幽　か　う　す　み　ど　り　　坂田　和子

坂田さんは、「市川の梨」で有名な大町にお住まいの方だが、ここには多くの梨畑があり、桜が咲くのよりわずかに遅く白い花を咲かせるのは見事である。特に高い丘から梨畑を見ると、一面が白い海のようである。よく見ると純白というよりわずかに緑めいて見えた。観察眼がすばらしい。

夕　さ　れ　の　白　の　重　な　り　山　法　師　　久間　早苗

山法師は緑につつまれた山中に、雪をかぶったように白色四弁のほうを広げ、その芯に緑黄色の小さな丸い花をつける。白い苞を頭巾に、つぼみの丸い集まりを法師の顔に見立ててこの名が付いた。「夕され」は昔から和歌に用いられる表現で、いくつもの白い花が重なり合う様子がうかがえる。

異　界　へ　と　誘　ふ　迷　路　夜　の　藤　　坂井　博

藤の花は青空に映える昼間も美しいが、夜は静寂な雰囲気の中、明かりに照らされる藤の花は一味違いライトアップされた藤は、幻想的で息を飲むほどの美しさで、まるで別世界の異界に誘われたようである。

めだか孵化たつた二ミリの独り立ち　　池田　文枝

めだかは孵化したばかりの稚魚の体長は二ミリ位で、よく探さないと気が付かないほどである。水槽や水盤などで飼われ涼味が鑑賞される。そんな微細な生き物でも命は命、しっかりと独り立ちしていくのである。

潮鳴集

天地を捕らへ　須賀ゆかり

逆しまに天地を捕らへ女郎蜘蛛
＊風が街軽くしてゐる五月かな
馬鈴薯の花をコップに北の駅
からつぽの抽斗に風更衣
たそがれてなほ薔薇園の微熱かな

三人称　菅原健一

＊サングラスして三人称となりたがる
新樹光いまだけ有神論者たり
手足なきことの自在や蝸牛
青嵐絵馬それぞれが語り出す
水すまし終らぬπを熟知せり

いちにちひとつ　稗田寿明

夏蝶の軌跡は風を奏でをり
教会に集ふひとの輪薔薇匂ふ
その父の夢の続きをダービー馬
「無題」てふ絵画涼しき風を呼ぶ
＊いちにちにひとつのしごとかたつむり

水玉　七田文子

黒松の肌ごつごつと走り梅雨
＊夏来る草間彌生の水玉に
青葉冷え柱時計の中に闇
大事なもの仕舞ひて忘る浮いて来い
暑に耐ふる地球の裏の果実食み

薬箱　三好千衣子

背の伸びし姿まぶしむ更衣
衣更へて殊更肩の力抜く
麦秋や夫の匂の薬箱
海よりの光吸ひ込む袋掛
＊蟻地獄謀反はいつも突然に

夏羽織　阿部眞佐朗

メーデーのジムのバーベル担ぎけり
花は葉に十五で入りし相撲部屋
＊ボクサーの津軽訛や修司の忌
粒立ちよく筍飯の炊き上がり
負方に美学ありけり夏羽織

去来抄　大森春子

楽器ケース背負ふ一団若葉風
自治会費集めに来たるアロハシャツ
＊初松魚啖呵を切つてみたきかな
父の日の父の寡黙を諾へり
その中に去来抄ある土用干

畳々　古居芳恵

石切の山峨々として緑雨中
艶めける色に緑雨の煉瓦塀
＊三百年の松は畳々風青し
快走のサドルは高く新樹光
山鳩の銜み鳴くこゑ明やすし

天命　藤代康明

一碗の宇宙の青さ新茶汲む
＊天命をすとんと知つて一夜酒
クルーズ船見送る丘の花蜜柑
明治座にならぶ日傘や谷崎忌
子子のシンクロナイズドスイミング

風鈴　広海あぐり

風鈴の高さを変へて風の午後
樹齢等しく被災地の夏木立
父の日や昔なじみの煮豆買ふ
青葉時雨大地を掴む大樫
＊書を曝す編集後記の候文

沖作品

能村研三 選

風の香を残し単線単車輛　東京　頓所　敏雄

＊虹二重色交はれば消ゆる色
方寸に陸奥湾の和ぐ青簾
無味といふ白湯の涼しき朝かな
夜のみどり幽けき揺れの湖底めく

＊咲き満ちて桜淋しき分教場　青森　工藤　邦子
国境も戦も知らず鳥帰る
春耕や土黒黒と蘇る
見納めと父口ぐせの花見かな
切支丹眠る島なり春の波

＊サイダーの百のつぶやき地下茶房　東京　岩波　博庸
はらからの集ひて早苗開きかな
切れ味を研師の試す夏大根
篤農の田に早々と青田風
細眉の娘の更衣余念なき

連翹の濃き滴りに酔ふやうな　市川市　坂田　和子
咲き満ちてなほ静もれる白木蓮
ときめきの時もありしか紫木蓮

＊梨の花咲き満ち幽かうすみどり
切株に幾世の重み春の雨
初つばめ門前仲町佃煮屋　埼玉　久間　早苗
クラリネット四重奏へ若葉風

＊夕されの白の重なり山法師
打ち寄せて離れ海月のさみしさは
化学式数式とほく昼寝覚

＊異界へと誘ふ迷路夜の藤　千葉　坂井　博
遠足の朝や酢飯の香に目覚め
若冲の「ぼたん」に競ひ咲く牡丹
粉を吹きしはの梅干梅雨晴間
息切らせ幼追ふ保母若葉風